

「心の頑なさ」

2014年08月12日

マルコによる福音書4章10節～12節。イエスがひとりになられたとき、十二人と一緒にイエスの周りにいた人たちがたとえについて尋ねた。そこで、イエスは言われた。「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられているが、外の人々には、すべてがたとえで示される。それは、／『彼らが見るには見るが、認めず、／聞くには聞くが、理解できず、／こうして、立ち帰って赦されることがない』／ようになるためである。」

主イエスは、ガリラヤ湖の岸から少し漕ぎ出した舟の上から、湖畔に群がる民衆に「種蒔き」のたとえを語られた。そして最後に「聞く耳のある者は聞きなさい」と結ばれた。

その後、主イエスと弟子たちだけになった時、弟子たちは「種蒔き」のたとえの意味が分からなかったので、再度尋ねた。その問いに対し、まず「あなたがたには神の国の秘密が打ち明けられているが、外の人々には、すべてがたとえで示される」と答えている。あなたがた、弟子たちには神の国の秘密が打ち明けられているという。本当であろうか。彼らは主イエスの愛と真実を知り、無垢の思いで従っていたことは確かである。しかし、正しくは理解していなかったというのが本当であろう。最後まで、主イエスの思いと弟子たちの思いは乖離していた。その乖離は、捕縛と十字架において露わになっている。

主イエスは弟子たちを信頼し、あなたがたには神の国の秘密を知らされているが、外の人々にはたとえで示されると言われた。ところが、そのたとえも理解し難い。預言者イザヤの「彼らが見るには見るが、認めず、／聞くには聞くが、理解できず、／こうして、立ち帰って赦されることがない」の言葉を引用し、人間の心の頑なさを指摘している。この言葉は、イザヤ書6章9節～10節を意識した言葉で、正しくは「行け、この民に言うがよい／よく聞け、しかし理解するな／よく見よ、しかし悟るな、と。この民の心をかたくなにし／耳を鈍く、目を暗くせよ。目で見ることなく、耳で聞くことなく／その心で理解することなく／悔い改めていやされることのないために。」である。

イザヤは、神殿において主が御座に座しておられる幻を見た。天使セラフィムが飛び交い、神への賛美を歌い、敷居は揺れ動き、神殿は煙に満たされた。イザヤは「聖なる神」を見たので、災いだ、私は滅ぼされる、万軍の主を仰ぎ見たと自らの汚れと罪におののく。すると、セラフィムの一人が、祭壇の炭火をイザヤの口に触れさせて「あなたの咎は取り去られ、罪は赦された」と宣言する。そして、主の「誰を遣わすべきか。誰が我々に代わって行くだろうか」という声を聞く。イザヤは「わたしがここにおります。わたしを遣わしてください」と応える。イザヤが預言者として召し出されたドラマチックなシーンである。その後、上述の9節～10節の御言葉が告げられる。預言者は神の言葉を語り、民を悔い改めに導くことが務めである。ところが、イザヤを召し出した神は、民は目で見ても見えず、耳で聞いても聞こえず、心で理解もせず、悔い改めていやされることもないと言われる。預言者の務めが拒絶されるところで、イザヤは預言者として立ったのである。

主イエスは、イザヤ書の言葉から人間の心の頑なさを述べている。神の国の秘密を知らされた弟子たちを教会と捉えるなら、教会は主イエスの福音を知り、従っているか。神は私たちの心と行いをお見通しである。時代の苦悩を分かち合い、平和を実現するために労する生き方に押し出されたいと願う。